

Muv- luv 蒼き魔神

塩ケーキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

*マブラブオルタネイティブ本編物語にシユウ・シラカワが干渉したクロス物です。OG本筋では最終戦のあとOGDP最終戦がありますがその間に発生したものと想定しています。

▼今回初めて執筆、投稿させていただきます。

▼クロス物読んでるうちに書いてみようと思い立った勢いのです、矛盾、話の流れの不備など多々あると思いますがご容赦ください。

目

次

一話：蒼き魔神

二話：会談

三話：接觸（旧）

三話：接觸

25 20 12 1

一話：蒼き魔神

「それも私だああああ…………！」

アダマトロンの爆発と同時にシユウの視界が白く染まる。

この空間を展開していたアダマトロンが滅した以上この空間は崩壊し、通常空間へと変わるはずである。

そして視界が次第に回復していくにつれ、通常空間であることを確認する。

しかし、すぐに異常に気づく。アダマトロンに転移させられたとはいえ、それ以前の戦闘は成層圏近くであつたはずなのにここは洋上である。

（通常空間への復帰時に座標のズレが発生したということでしょうか。しかしバラルの結界も解かれた今一体なぜ：地上へ転移した際にもズレが発生しましたが…）

「まずは現在位置の確認をするとしましょう。チカ座標はわかりますか？」

……

「チカ？」

自身と同乗していたはずの使い魔からの返答がない。あのおしゃべりな使い魔が返事をしないというのはおかしい。

念のため機内を軽く見回しても見当たらない。

（転移した影響でしようか…しかし、そうなると私も座標のズレがあつてもおかしくはないはず…これは…とりあえず情報が少なすぎますね、サテライトリンクへ接続して情報を得るとしましょうか。

…!? サテライトリんくからの反応がない。…グランゾンやシステムに異常はないようですね……疑問を解消するための情報が足りませんね。周囲に陸地など存在しないか確認してみましょう

グランゾンを上昇させていくと、9時方向に陸地を確認する。地形照合の結果、部分一致で横浜と結果が示される。

（妙ですね、横浜地域の地形がここまで変化する程の攻撃を受けたという情報はありません。それに周辺一帯に重力異常：陸地に接近すれば軍に捕捉される危険性がありますか：隠形の術を使うとしますか……いえ、ここは敢えて発見されて何らかのリアクションを確認をしたほうが現状確認には速いかもしません）

— 同時刻 国連軍横浜基地 香月副司令室 —

「……アイツが本物の白銀武だとして、持ってきた情報は……」

2001年12月24日、オルタネイティヴIV計画の中止と、オルタネイティヴV計画への移行。

ということは、もう猶予はあまりないことが分かる。しかし焦つても結果がついてくるわけではないし、肝心の〇〇ユニットの量子伝導に至つても今の理論で 150 億個の半導体を掌サイズにすることが出来ない。タイムリミットが確認できたからといって無茶をするわけではないが、ここは少しでも有利に状況を進める場を予め作つておくべきだろう。

もつとも、白銀武の話全てを信じていてるわけではない。

（何かあいつの情報を確定させれるような状況があればいいんだけど…当分は様子見か…）

情報を整理し終えてふと溜息をつき、次に行動すべきことと思案し始めた時、基地のアラートが鳴り始める。

(!?)

『香月副司令、至急司令室へお越し下さい！』

「ピアティフ取り急ぎ状況を説明して」

『現在、当基地へ洋上から高速で接近するUNKNOWNが確認されました！現在テフコン4を発令、戦術機を迎撃発進させました！』

「!?すぐに行くわ！」

(つとーその前に白銀にこの状況が発生したか確認すべきね)

呼び出しを行おうとしたところに、白銀が部屋に飛び込んでくる。

「はあ…ちょっと慌てすぎよ、落ち着きなさいな」

「す、すみません！先生。急にアラートが鳴つて訓練生は自室待機つてなつて…何が起こったのかわからなくて…それで俺急いでここに…」

「そう、まつ手間が省けたわ。今のあんたを見る限りわかつたようなもんだけど、一応確認しどくわ。現在UNKNOWNが接近中よ、あんた前の世界で今日こんな状況発生したか覚えてる？」

「い、いえ。俺が知っている状況で似ているのは、新潟にBETAが上陸した時や珠瀬事務次官がやつてきた日にHSSSTが落ちてきたことくらいで……」

(白銀の記憶にはない事象か…未來の事象を知った影響ですでに変化が起こり始めているのか、それとも…)

「そう…」

「すみません、俺⋮」

「落ち込んでる暇があるなら、自分のできることを考えて行動なさい。
時間は無限にある訳じゃないのよ?」

「はい……」

(いきなり記憶にない事象が発生したことで混乱しているようね、見
立て通り精神的に未熟なのは間違いなかつたわね⋮)

話すべきことは終わつたのか、香月は白銀をおいて足早に司令室へ
向かう。

—横浜基地司令室—

「遅れたわ、ピアティフ状況は?」

「依然U N K N O W Nは接近中。先ほど侵入予想地域の海岸線へ迎撃
機の展開が完了しました」

「香月博士、どう見ますかな?」

「米国、オルタネイティヴ推進派の差金⋮と言いたいところですけ
ど⋮」

「違うと?」

「恐らく。やり方が露骨でお粗末な上に特にあちらからアクションも
起こしていない、何より目立ち過ぎですわ」

「ふむ、では一体⋮」

「そろそろ目標を視認できる距離ですわね。オペレーター! 目標を捉
え次第、光学映像をモニターにまわして頂戴」

「了解しました。え? これって」

「どうしたの?」

「…目標確認しました、そちらへ映像をまわします」

「!？」

「これは…」

映像には、青い戦術機らしき物体が映し出されている。
しかしそれにしては移動速度が速過ぎる。

「映像これで間違いないの？」

「は、はい。カメラに異常はありません」

「形状から見て、戦術機かしら…目標に該当する戦術機はある?
照合しましたが、該当なしです」

「UNKNOWNの大きさはわかるかしら?」

「お待ちください。：推定30メートル前後と思われます」

「30メートルか、だとすると旧型の試作機かもしだんな」

「いえ、それはあり得ませんわ。旧型…いえ新型でも、あの速度を出す
ことはできない。それに映像を見る限り相当な重装甲のようですね」

「重装甲での速度か…」

「!? UNKNOWNが、迎撃機近くで静止しましたが、こちらの最終通告にも反応がありません」

「攻撃を許可する、目標を撃墜せよ」

「ああ、それと撃墜した後の残骸を部隊に回収させて」
「了解しました」

—横浜海岸線—

「隊長目標が、空中で静止しました！」

「指示があるまで待機せよ…こちらから通告を行う」

『貴機は日本帝国の領地を侵犯している！速やかに転進せよ！繰り返す速やかに転進せよ！』

(予想通り迎撃機が出てきましたが、妙ですね。この通信手段はかなり古い形式です。加えてあの機体…データベースにありませんね。それに気になることを言つていましたね。”日本帝国”と…)

「目標から応答ありません」

「目立つた動きはないようだが、撃墜許可が降りた。各機攻撃開始！」

「了解」

各機が同時に目標へ発砲を開始するが、弾丸がUNKNOWNに到達する少し手前で軌道を変え逸れていく

(た、弾が逸れてるだと!?)

常識外の現象に意識を奪われ指示を出すことが出来ず、全機弾切れになつてからようやく我に返り各機へ近接戦闘の指示を出す。

(交戦の意志がないことを伝えるつもりでしたが、まさか即座に攻撃とはね…また攻撃される前に通信をいれますか)

司令室もまた写されている映像に驚愕していた。

(弾が逸れてる…ことはラザフォード場：ML機関搭載機をあそこまで小型化に成功したなんて情報入ってきていない…とはいって、ラザフォード場を展開しているとなると無人機と見るべきね。目標近くまでリモート操作して臨海反応で自爆させる新規運用型のG弾かもしれないわ、厄介ね…)

「迎撃機を一旦後退させなさい、近接戦闘は無意味よ」

「り、了解しました！各機へ一時後退せよ、繰り返す一時後退せよ」

(さて、どうしたものかしら…ラザフォード場が展開しているんじや下手に手出しへできないし、もし攻撃に反応して臨海反応がスタートするよう設定されているとしたらまずいわね…)

「UNKNOWNから通信です！」

「!？」

『…えますか？こちらに交戦、侵略の意志はありません。繰り返します、こちらに交戦、侵略の意志はありません』

（つ!?無人機じゃない！…ラザフォード場の多重干渉問題をクリアしているっての!?）

香月は信じがたい事態に我を忘れてしまうが、頭を振りすぐに思考を切り替える。

「私が通信に出るわ、回線回して頂戴。映像通信で入ってるかしら？」

「いえ、音声通信のみのようです。では回線回します、どうぞ」

「こちら国連横浜基地、副司令香月よ。聞こえるかしら？」

『ええ、聞こえています』

「とりあえず、いくつか質問に答えてもらいましょうか。そちらに侵略などの意志はないにしても、あんたは事実日本帝国の領地に侵犯してるわ」

『ええ、構いません。代わりと言つてはなんですが、こちらも質問をさせてください』

『？構わないわ。でもまずこちらの質問に答えて頂戴、あんた人間よね？』

『ええ、間違いなく人間ですよ』

『そう、それじゃあ名前と所属は？』

『シユウ・シラカワと言います。所属は…そうですね、一時的ですが鋼龍戦隊に身を寄せて います』

（日系人…？ということは米国特務部隊所属の人間かしら？でも部隊名が米国らしくないわね）

「知らない部隊名ね、どこの国の部隊かしら？」

『地球連邦軍所属の部隊ですよ、秘匿部隊ではないはずですがご存知ありませんか？』

「地球連邦？そんな夢物語みたいなもんこの世界のどこにもないわよ、あんた何言つてるのかしら？」

（妙な事を言つてくるわね…）

（やはり、私のことを知らないようですね。それに地球連邦が存在しない…これはまさか…）

「ま、いいわ。それよりもあんたの戦術機についてだけ、動力源はML機関を搭載してるのかしら？」

『聞いたことのない機関ですね。この機体の動力源は仰るものとは別のものですよ』

（ML機関じゃないですって？…だとすると一体…）

現時点で副次的とはいえ力場を展開するほどの動力源は、ML機関のみのはずである。予想外の返答にしばし思考を奪われる。

『質問は以上でしようか？こちらの質問に答えていただきたいのですか』

「え、ええ、今はそれだけよ。それじやあんたの質問に答えるわ」

『それでは…グランゾンという機体名をご存知ですか？』

「グランゾン？いえ、知らないわね」

『今は、何年のいつでしようか？』

「2001年の10月23日よ」

『では最後です、ここは日本の横浜で間違いありませんか？』

「ええ、間違いないわ。あえて訂正するなら日本帝国の横浜ね」

（なるほど…私の知る歴史では先ほどの年時点では日本帝国は消滅して

いるはず。もし情報が真実であるならば、ここは異なる歴史を歩んだ平行世界、それも私の居た時間軸から見ると過去の世界…なぜ飛ばされたかなど原因はまだ掴めませんが現時点では十分ですね）（予想と全く違つて状況確認の質問ばつかね…こいつの回答から得られたのは存在しない国家連合体と部隊名、それに恐らく未知の動力であること…こいつが狂人でないとして、そこから導き出せるとしたら信じらんないけど…アレ（白銀武）の事もある…私の因果律量子論が正しいのであれば…）

「そつちの質問は終わりかしら？」

『こちらからは以上です。』

「じゃあこつちも最後の質問よ。あんたB E T A つていう生命体…知つてるかしら？」

無意識に意地の悪い笑みを浮かべながら質問する香月。

その質問に司令室にいた人間全てが疑問を浮かべる、何しろ誰もが知る当たり前の事を質問しているのだ。

そして、その回答に驚愕する。

『いえ、知りませんね。初めて聞く生命体です。もつとも呼称が異なるだけで知っている可能性も有りますが』

（B E T A を知らない…！間違いないわ！）

「そう…ところで話は変わるんだけどいいかしら？」

『構いませんよ』

「一つ提案があるんだけど」

『ほう…提案とは？』

「あんた、私達に協力しない？聞いた感じ”ココ”では根無し草だと思つたんだけど？」

「香月博士!?」

突然何を言い出すのかと、ラダビノツド司令が身を乗り出すが、それを静かに手で制する。

「どうかしら？もちろん相応の見返りもするわ」

（どうやらこの香月という人物は私がこの世界の住人でないことに気づいたようですね…）

『一つ…条件があります』

「何かしら」

『いつでも協力関係を解消してもよい…ということです』

「いいわ、協力するに値しないと思った時点で貴方の好きにして構わないわ」

『わかりました。いいでしよう』

承諾の意を受け、ますます笑みを強くする香月。

（恐らく未知の技術との接触…こんな興奮することなんて生まれて初めてかもしけないわね）

「そう、ありがと。それじゃそこにいる部隊にこちらへエスコートさせれるわ、誘導指示に従つて頂戴」

『オペレーター、迎撃部隊にアレをこっちまで連れてくるよう指示して頂戴』

『了解しました』

「香月博士…いいのかね？工作員の可能性も考えられる」

「心配ありませんわ、工作員ならもつとこちらの情報を手に入れようとするはずですわ。侵入するにしてもこんな手のこんだことする工作員はいませんわ」

「ふむ、しかし万が一もある監視をつけるなりはしておいたほうがよいだろうな」

「当然ですね。オペレーター警報解除なさい」

「了解しました。デフコン4解除します」

「それじゃ、私は”シユウ・シラカワ”と接触してきます。司令申し訳ありませんが後処理をお願いしますわ」

「了解した。護衛などはどうするかね」

「伊隅にでも任せますわ。ピアティフ、伊隅にこつちへ来るよう連絡を入れて頂戴。ああ、それとわかつてると思うけど、コチラへ向かってるあの戦術機は例の格納庫へ誘導しておいて」

「了解しました」

そうして、香月は未知なるモノへの接触を図るべく移動を始めた。

(さて、とりあえず社をシユウ・シラカワと接触する際の隣室へでも移動させてリーディング準備をしておきましょうか)

ここに、蒼き魔神とその操者が異世界への干渉を始めた、これが如何なる影響をこの世界に与えるかはまだ誰も予期し得ない。

二話・会談

隊長機からの誘導に従い、移動すると前方に軍事施設が存在することを確認する。

（地上部分から判断すると民間の学校を再利用した士官学校に見えますが、地下深くから反応がありますね…ということは、地上施設の規模から考えて地下が主要施設のようですね。しかし周囲一体は、完全に荒野になっていますね…この重力異常と何らかの関係があるのでしようか）

『我々の誘導はここまでだ、施設内の誘導はオペレーターからの通信に従ってくれ』

「わかりました」

『…では、誘導を引き継ぎます。指示に従って移動してください』

指示通りに移動していくと、地下施設へと続くエレベーターへと案内される。

（なるほど…機密レベルの高い場所へ招き入れますか、私を含め情報をなるべく秘匿する方針のようですね…とはいっても、罠の可能性も少なからず存在しますし警戒するに越したことはありませんね）

数分の後、目的地に到着したのかエレベーターが停止する。

見ればメンテナンスドックが複数空いているが、空間の巨大さに比べ機体が全くないことに違和感を覚えるがすぐに疑問が氷解する。

（ほう、あの機体専用の施設でしたか…先ほどの機体から技術水準を推測していましたが、少しばかり修正が必要がありますね）

数瞬、思案していると二人の女性が移動してくるのを確認する。

『聞こえるかしら？こっちのドックにつけて頂戴』

「ええ、わかりました」

返答後、グランゾンをドックにつけると降りることなく機内から話しかける。

「さて、貴女が副指令香月でよろしいですか？」

『ええ、私が香月よ。こつちは私の護衛みたいなもんよ』

「なるほど…もつと大挙してくると思っていましたが、意外ですね」

『あら、協力関係は信頼が命でしょ？』

（自分から可能な限りの行動を見せてこちらの信頼を得る算段ですが、中々強かな人物ですね。…周囲の生体反応は彼女たちを含めて3ですか、後一人どこかにいるようですが、伏兵というわけではなさそうですね）

『さて、そろそろ降りてきたらどうかしら？つまらない罠なんかは仕掛けないわよ』

「フツそのようですね」

グランゾンのハツチが開放され、香月達の前にその姿を表すがその姿の意外性に戸惑いを覚える。

（強化装備も着用せずに乗り込んでいるとはね…声から若いとは思つていたけど20代前半でここね）

「ふつ通信越しでは、顔をお見せしていませんでしたね」

「予想以上に若くて驚いただけよ。さて、ここで立ち話つてわけにもいかないわね。あそここの部屋でも話をしましようか」「わかりました」

会話を終えると足早に移動を開始する。

「伊隅、あんたは呼ぶまで室外で待機してなさい」
「ハツ了解しました」

護衛の伊隅という女性を置き二人は室内へと入る

「さて、改めて名乗るわね。私は、ここ横浜基地の副指令香月夕呼よ」「シユウ・シラカワです。さて、率直に聞きますが貴女は、私がこの世界の住人ではないと考えていますね？」

「ふうん…なんでそう思つたのかしら?」

「貴女の最後の質問からですよ。あの質問は、恐らくこの世界において常識的な内容だと思つたからですよ」

「なるほどね…ま、それだけじゃないけどね。アンタの質問内容は、状況把握的のモノに限られていた。そして私が知る限りアンタの機体は、既存の戦術機設計思想とかけ離れてる、新型を作るにしてもまず有り得ない設計ね」

「そうですか、納得がいきましたよ。B E T A : でしたか、その生命体について説明していただけますか?」

「B E T A の情報については、後で外にいる伊隅に説明させるわ。まづこの世界の情勢から教えるわ」

「わかりました、お願ひします。その前にひとつ、この世界は私の居た世界とは異なる歴史を歩んでいるようです、世界大戦前後から軽く流れのみをお願いできますか」

香月は、シユウに歴史から、世界情勢、各国の勢力、及び現状を提供する。

(随分歴史が異なっていますね…特に早い段階で宇宙進出し、異星生命体との接触が最大の相違点ではありますね)

「大まかではあるけど…ま、この世界に関してはこんなところね。さて
…次はこっちの質問に答えてもらつていいかしら？」

「かまいません。どうぞ」

「まずアンタの載つてる機体、アレの動力機関について教えて頂戴」
「ほう…グランゾンの動力機関についてですか」

「今の私達の技術で重力場を展開できる動力はML機関だけよ。でも
アレは違う動力なのでしよう?」

「ええ、仰る動力機関とは異なります…ML機関がどのような機関か
はわかりませんが、まずは訂正からしましよう。グランゾンが展開し
ている力場は重力場ではありません。歪曲フイールド：所謂空間歪
曲です。そしてグランゾンの動力機関は、ブラックホールを利用した
対消滅エンジンです」

「は…?」

予想を遥かに超える返答に思わず素つ頓狂な声をあげてしまう。

「ま…待つて。ちょっと待つて。今アンタなんて言つたの?」

「歪曲フイールド、対消滅エンジンですが」

「……つてことは何…アレって…ブラックホールで動いてるってこ
と…?」

「ええ、その通りです」

余りの事にしばし呆然となるが、真偽を確かめるため手元の端末か
ら社のリーディング結果を見て再度驚愕する。

(感情から虚偽の結果は無し…イメージは理解不能…つてことはまさ
か嘘でしょ…)

「さて、納得いただけたところでお願ひがあります」
「な、なによ」

「グランゾンへは、触れないでいただきましょう。下手をすれば周囲一体消滅することになりますので…もつともグランゾン自身ブラツクボツクス化されていますから解析のしようがありませんが」

「わ、わかつたわ」

「ありがとうございます。さて、貴女は私に情報を提供していただけますが…私に何を求めますか？」

「言われて、頭を冷静にするべく軽く目を閉じ、思考を切り替える。

「…戦力提供と技術提供つてところかしら」

「なるほど…戦力提供に関しては私の裁量で判断させていただきましょう。下手に介入して騒ぎになれば火種になりかねません」

「そうね…グランゾンの戦力がどの程度のものかわからないけど、介入は最小限に留めたほうが良さそうね」

「それと技術提供に関してですが、提供しても問題がないモノを選定するために…戦術機…でしたか、そちらに関する情報をいただきたいのですが」

「ちよつと待ちなさい。技術提供に関してはコツチが要求したものを受け提供してもらいたいわね」

「技術水準がわからない状態で提供するなど愚か者のすることですよ。なにより貴方達を自滅させるようなものですからね」

「つ…（チツ確かにその通りね…提供されても建造することができない、もし建造できても制御できないんじや意味ないわ）…わかつたわ。後で貴方用の個室を用意するから、そこで資料を提出するわ」

「ええ、お願ひします」

「ところで、アンタのアレ…グランゾンだつたわよね、何を目的に作られたモノかしら？ 意匠を見る限り威圧効果を狙つて いるように思えたんだけど？」

「グランゾンは、対異星人戦闘用として私どもう一人が主要メンバーとなり設計、開発した機体です。そしてご明察ですね、異星人への威圧を狙つての意匠ですよ」

「はあ…アンタが作つたっての? つてことはアンタ科学者? なんで自分で操縦してんのよ?」

「フツ色々事情がありましてね」

「ま、私には関係ないことだわね。それにしてもアンタの居た世界も地球外生命体が地球に来てるつてことか…どこも物騒な世界なものね」

「全くですね。とはいえ、私の居た世界はコチラよりも危険な世界かもしけませんがね」

「どういうことよ?」

「さて……」

静かに微笑を浮かべ、はぐらかす。

「はあ…それじゃ、B E T Aについて教えるわ」

手元の端末を操作し外で待機している伊隅を呼び出す。

「アンタから提供される技術が何であるにせよ、伊隅の部隊が実験部隊となるわ。顔合わせも兼ねて紹介しどくわね、伊隅入つて頂戴」「ハツ失礼します!」

「やめてよね、そういうかたつ苦しいの。ま、いいわ。とりあえず改めて紹介しどくわ、こつちが私の協力者の…」

「シユウ・シラカワです。よろしくお願ひします」

「伊隅みちる大尉であります」

「シラカワ博士に、B E T Aについて説明して頂戴」「ハツ」

伊隅は、スクリーンに映しだされた各種B E T A、ハイヴについて説明していく。

(…遠距離攻撃可能な属種は、1種のみ…しかも当初は前線に存在し

ていなかつた：投入のタイミングも妙ですね、本拠地周辺にまで迫られたタイミングでの投入：なによりその他の属種は、侵略を行う生物にしては攻撃能力がなさすぎます。もし戦況に応じて進化をするならば他の属種も光線級のように何らかの能力を付与され進化しているはず…にも関わらず基本的に物量作戦を継続している）

元いた世界での数多の生体兵器を知るシユウは、B E T Aについてある種の疑問を抱き伊隅に質問する。

「すみませんが、質問してもよろしいですか？」

「構いません、何でしようか」

「要塞級の触手は、強酸を分泌するようですが、接触時のみですか？自ら強酸を放出することはないのですか？」

「はい、触手の衝角に接触した時に限定されます」

（なるほど…確信は持てませんが、ハイヴ・ピラーから何らかの物が不定期に太陽系を脱出する軌道で打ち上げられていることから考えて、B E T Aは元々侵略生物ではない可能性がありますね）

「B E T Aについては、疑問点もありますが理解しました。ありがとうございます」

「さて、説明も終わつたわね。アンタのこの基地での身分だけど私個人の私的な外部協力者として登録しといたわ、戸籍情報なんかはダメーのものを作成しておいたから使つて頂戴。ここへも通行可能なセキュリティLVの高いカードを用意したわ。わかってるでしようけど基本的に基地を出歩いて目立つようなことはしないでよね」
「わかっています。基本的に貴女方以外とは接触を持たないようになりますつもりです」

「そつ。部屋へ案内するから、ついてきて」

（さて、とりあえず活動拠点は手に入りましたがこれからどうしてい

くべきか見極める必要がありますね)

今後に向けての思考を行いながら移動を開始した香月たちの後に
続いた。

三話：接触（旧）

与えられた個室内の端末から先日提供された戦術機に関する資料を確認し、こちらの世界の現時点で利用可能な技術と提供することを避けるべき技術を選定していく

（この年代で異文明からの技術提供もなく、ここまで技術を発展させているのは評価すべき点と言えます）

（とはいっても詰められた状況下のためか荒削りの部分が多いまま実戦投入され、ある程度の戦果を上げてしまつたがためにその点を修正、発展させていくことが発生していませんね）

地上での基本運用方法は元いた世界のPT等とほとんど大差はないが、OSなどの基本性能が雲泥の差である。

またジェネレーター出力も低いため高出力を必要とするような兵器を持たせるようなこともできない。

（人手不足などの要素から汎用性を突き詰めた結果、特機のように一点点に秀てるも扱いづらい機体を開発することは中止したと見るべきですね。加えて光線級の攻撃に個人単位で対応できる技術ないことも影響が大きいのでしょう）

（これらの要素から推察すると、地下工廠で建造されていたあの巨大な戦術機は何らかの新技術用のテストヘッド機もしくは専用に運用するためのモノでしょうね。恐らく香月博士がまだこちらに開示していないML機関関係：重力場を展開すると言つていましたが、こちらの重力場制御理論を提供するかは保留しておきましょうか）

考察が済んだため、再び資料の確認を進め始める

（現時点の資料から判断して提供しても問題がない技術は、機体制御用の『Tactical Cybernetics Operating System』『装甲材』あとは基本

的な『非実体兵器』…といったところですか）

方針を固めたのか、必要なデータをまとめ作成を始める。

（それとグランゾンは国連や他国から追求を受ける可能性があります。有事に備えダミーデータは用意しておきますか）

数刻後、提出用の資料が完成したため香月に連絡を入れる

「私は。先日お約束した資料が完成したのでお渡ししたいのですが
⋮」

『えらく早いわね…正直3日くらいかかると思ってたわ。申し訳ない
んだけど、今事後処理で手が離せない私の部屋までもつてきてくれ
るかしら』

「ふつ大変ですね」

『誰のせいだと思つてるのよ…』

「それでは、そちらへ伺います」

『ええ、お願ひするわ』

「お待たせしました。こちらが資料になります。データ流出を防ぐこ
とも兼ねて紙媒体でお渡しします」

「助かるわ。詳細は後で確認するけど、何を提供してくれたのかサツ
と説明してくれない？」

「わかりました。機体制御用のOSと装甲材、非実体兵器です」

「へえ…何かしらの兵装は提供してもらえると予想していたけど、O
Sは予想外だつたわね。」

「そうですか？貴女程の方がその点に気づかなかつたのは意外です
ね。私から見れば、姿勢制御入力、自動拳動に問題があります。加え
て熟練者の動きを学習し新兵でも最適なモーションパターンを行う
ことをサポートするということも行つていませんでしたからね。こ

れでは生存率が向上しないのも納得ですね」

「耳が痛いわね、たしかに扱いややすくさせることにのみ目が向けられていたのは確かね」

「理論や設計に関しての詳細は、資料で確認してください」

「わかつたわ。それとこの非実体兵器だけど…」

香月が、話を続けようとしたところで部屋の扉が開き一人の男が飛び込んでくる。

「せ、先生！昨日の事…で…」

早口で何かを言おうとしたようだが、こちらに気づいた途端声が途切れ。

香月の方へ視線を向けると目を細めてこの男を見ているようだ。

(まずいわね…こいつと接触させる気はなかつたってのに)

数瞬沈黙が流れるが、男が口を開く。

「あんた…誰だ?!」

香月の様子から自分と接触させるつもりはなかつた人物と判断する。

ここはセキュリティLVの高い場所だつたはずだが、このような人物がここへ来れるということに疑問を抱くがこの場で問うわけにもいかない。

「申し訳ありませんが、貴方に応える義務はありませんね」

「なつなんだと?!」

「それでは香月博士、私はこれで失礼します。何かあればまた連絡してください」

「ええ、わかつたわ。それじゃ」

「ま、待て！」

会話を打ち切ると、速やかに退室する。

(伊隅大尉の服装とも異なるものでしたし、士官候補生でしようか：となるとますます疑問が沸きますね：どのような人物か調べてみますか)

端末からシユウが移動したことを確認すると香月が口を開く。

「白銀…アンタねえ訓練はどうしたのよ。てか：何しに来たのよ？」
「あ、訓練はもう終わつて…それで俺、昨日のことが気になつてそれを聞きに…つてそうじやなくて！」

「なによ？」

「誰何ですか!? アイツは！」

「この基地の人間よ。アンタには関係ないわ」

「そんな馬鹿な！俺はあんな奴知らない！前の世界で一度も見たことがない人間がいるなんて変ですよ！」

「はあ…白銀アンタね、基地の人間全員の顔を見知ってるつての？それにアンタ言つてたわよね、記憶が曖昧なところもあるつて」「うつ…それは…で、でも」

「白銀、この際はつきり言つておくけどアンタに全てを教えてるわけじゃない。当然アンタの知らないことも多いのよ、そして昨日の件もアンタに教える必要はない。それなのに自分が知らないからおかしいなんて思わないで」

「くつ」

「それじゃ、私は忙しいの。出て行きなさい」

「はい……」

肩を落とし気落ちした様子で白銀が退室していく。

(まつたく…白銀にココに来れる権限を与えたのは失敗だつたかも
ね。まさかシユウ・シラカワがいるタイミングで乗り込んでくるなん
て。私の様子から察してくれたみたいだけど白銀に疑問を持たれた
可能性は高い…当然白銀の特殊性についてじやないでしようけど：
どうしたものかしらね)

(とりあえず、白銀のことは一旦置いておきましょか…すぐにバレ
るようなモノでもない。それよりもシユウ・シラカワから提供された
資料の確認のほうが優先事項ね)

思考を切り替え提供された技術資料を確認していく。

(参つたわね…今の世界に、この資料を公開すれば間違いなくパラダ
イムシフトが起こるでしょうね。とはいって、これは様々な面で優位に
立つための武器になる…当面は、極秘裏に製造させA—01部隊にの
み運用させて性能試験を実施、優位性の確認と技術の確立をさせると
するか)

今後の算段を立て終わり、即座に次の行動に移り始める。

(さて、忙しくなるわね)

三話：接触

与えられた個室内にて先日提供された戦術機に関する資料を確認し、こちらの世界の現時点で利用可能な技術と提供することを避けるべき技術を選定していく

(この年代で異文明からの技術提供もなく、ここまで技術を発展させているのは評価すべき点と言えます)

(とはいえ追い詰められた状況下のためか荒削りの部分が多いまま実戦投入され、ある程度の戦果を上げてしまつたがためにその点を修正、発展させていくことが発生していませんね)

地上での基本運用方法は元いた世界のPT等とほとんど大差はないが、OSなどの基本性能が雲泥の差である。

またジエネレーター出力も低いため高出力を必要とするような兵器を持たせるようなこともできない。

(人手不足などの要素から汎用性を突き詰めた結果、特機のように一点点に秀てるも扱いづらい機体を開発することは中止したと見るべきですね。加えて光線級の攻撃に個人単位で対応できる技術ないことも影響が大きいのでしょう)

(これらの要素から推察すると、地下工廠で建造されていたあの巨大な戦術機は何らかの新技術用のテストヘッド機もしくは専用に運用するためのモノでしょうね。恐らく香月博士がまだこちらに開示していないML機関関係：重力場を展開すると言つていましたが、こちらの重力場制御理論を提供するかは保留しておきましょうか)

考察が済んだため、再び資料の確認を進め始める

(現時点の資料から判断して提供しても問題がない技術は、機体制御用の『TC—OS（“Tactical Cybernetics

Operating System』)『装甲材』あとは基本的な『非実体兵器』…といったところですか)

方針を固めたのか、必要なデータを洗い出し作成を始める。

(それとグランゾンは国連や他国から追求を受ける可能性があります。万が一に備えダミーデータは用意しておきますか)

数刻後、提出用の資料が完成したため香月に連絡を入れる

「私は。先日お約束した資料が完成したのでお渡ししたいのですが」

『えらく早いわね…正直3日くらいかかると思ってたわ。申し訳ないんだけど、今事後処理で手が離せない私の部屋までもつてきてくるかしら』

「ふつ大変ですね」

『誰のせいだと思つてるのよ…』

『それでは、そちらへ伺います』

『ええ、お願ひするわ』

「お待たせしました。こちらが資料になります。データ流出を防ぐこ

とも兼ねて紙媒体でお渡しします」

「助かるわ。詳細は後で確認するけど、何を提供してくれたのかサツと説明してくれない?」

「わかりました。機体制御用のOSと装甲材、非実体兵器です」

「へえ…兵装周りは提供してもらえると予想していたけど、OSは予想外だったわね。」

「そうですか?貴女程の方がその点に気づかなかつたのは意外ですね。私から見れば、姿勢制御や自動拳動に問題があります。加えて熟練者の動きを学習し新兵に最適なモーションパターンを行うことを

サポートするということも行つていませんでしたからね。これでは生存率が向上しないのも納得ですね」

「耳が痛いわね、そういうふた観点に目を向けられていないのは確かね」

「詳細に関しては、資料で確認してください」

「わかつたわ。それで非実体兵器だけどBETA相手に…」

香月が、話を続けようとしたところで部屋の扉が開き一人の男が飛び込んでくる。

「せ、先生！昨日の事…で…」

早口で何かを言おうとしたようだが、こちらに気づいた途端声が途切れ。

香月の方へ視線を向けると目を細めてこの男を見ているようだ。

(まずいわね…こいつと接触させる気はなかつたってのに)

数瞬沈黙が流れるが、男が口を開く。

「あんた…誰だ!？」

「申し訳ありませんが、貴方に応える義務はありませんね」

「なつなんだと!？」

「それでは香月博士、私はこれで失礼します。何かあればまた連絡してください」

「ええ、わかつたわ。それじゃ

「先生!？」

会話を打ち切ると、速やかに退室する。

(雰囲気からすると訓練生でしょうか?しかし、となると疑問が沸きますね…どのような人物か調べてみますか)

香月が大きなため息を吐いてからようやく口を開く。

「白銀…アンタねえ訓練はどうしたのよ。てか…何しに来たのよ?
「あ、訓練はもう終わつて…それで俺、昨日のことが気になつてそれを
聞きに…つてそうじやなくて！」

「なによ？」

「誰何ですか!? アイツは！」

「この基地の人間よ。アンタには関係ないわ」

「そんな馬鹿な！ 前の世界でもここに出入りしてた俺が一度も見たこ
とがない奴がいるなんて！」

「はあ…白銀アンタね、基地の人間全員の顔を見知つてるつての？そ
れにアンタ言つてたわよね、記憶が曖昧なところもあるつて」

「うつ…それは…で、でも」

「白銀、この際はつきり言つておくけどアンタに全てを教えるわけ
じやない。当然アンタの知らないことも多いのよ。それなのに自分が
知らないからおかしいなんて思わないで頂戴。それじゃ、私は忙し
いの。出て行きなさい」

「はい…わかりました」

肩を落とし気落ちした様子で白銀が退室していく。

(まつたく…白銀に権限を与えたのは失敗だつたかもね。まさかシユ
ウ・シラカワがいるタイミングで乗り込んでくるなんて。私の様子か
ら察してくれたみたいだけど白銀に疑問を持たれた可能性は高い：
当然白銀の特殊性についてじやないでしようけど…どうしたものか
しらね)

(とりあえず、白銀のことは一旦置いておきましょうか…すぐにバレ
るようなモノでもない。それよりも提供された資料の確認のほうが
優先事項ね)

思考を切り替え提供された技術資料を確認していく。

(参ったわね…今の世界にこの資料を公開すれば間違いなく世界が震撼するレベルの代物だわね)

(重力制御によるプラズマを利用しての小型核融合炉…非実体兵装を可能とする技術…現時点の装甲材からは考えられない強度を誇る装甲の精鍛技術…そしてこのOS)

「だけど、やっぱり最大の収穫はコイツよね。アレの制御に有効利用できるわ」

香月にとつてジエネレーターを利用される重力制御に関する技術、理論を手に入れたことが最大の収穫であろう。

「さてつと、とりあえず提供されたモノを作る優先順位はつと…それと人員確保に…フフ忙しくなるわね」

=====

人員を昼夜問わず最優先で動員した結果早期に試作品が完成する。だが予想を上回る進捗に至る最大の理由は、提供者自身が試作品の作成に協力したことだ。

「アンタが、手伝ってくれるのは意外だつたわね。どういうつもりかしらね？」

「別に他意などはありませんよ。現状を見るに時間が惜しいことに加えて下手に試作品で問題を起こされでは後々にも影響を与えるでしょうしね」

「なるほどね。なんにせよ助かったわ。知識は手に入れてもノウハウはないのだしね」

「それで、完成品の試験運用を誰に任せるとおつもりですか？」

「私の直属部隊に任せることよりもよ。アンタも前にあつた伊隅の隊よ」

「では私も試験運用に協力しても問題なさそうですね」

「あら。試験にまで協力してくれるなんて気前がいいじゃない」

「戦術機に搭載した際の影響は私もわかりませんからね。不意の問題にも対応可能な人間がいたほうが良いでしよう」

「助かるわ。それじゃ搭載予定機の調整が済み次第換装作業に入るわ」

「わかりました。では、私は最終確認をしてきましょう」

そう言うと、整備員の方へ向かい指示を出し始める。

整備員の質問などにも律儀に答えている様子を香月は腕を組みながらジト目で眺めている。

(見かけによらず面倒見がいい男ね…ま、この調子なら一両日中に準備は整いそうね)

さらにシユウ自身が試験運用に立ち会ってくれると申し出てくれるたこともあり、香月自身はアレに着手しても問題ないと判断する。

望外の戦力を手に入れるができる状況にはなったが、計画の肝部分の進捗が芳しくない…何か糸口を掴まねばならない。

香月は、自身の部屋へと足早に向かい始める。